



《子どもは天才！遊びの中で能力を伸ばす》

道を歩けば縁石の上を歩いたり、どこかに出かければ落ち着きなく走り回ったり…。子どもの行動に大人は常にドキドキさせられますが、実はこの行動には、身の回りの環境をつかみ、自らの能力を伸ばそうとする意味があります。

子どもにとって身体を動かすことは、体力の保持増進だけではなく、脳を発達させるために大切なことです。子どもは遊びの中で、自ら脳や身体を発達に必要な刺激を得ようとし、それにより生きる術を自ら学びます。



しかし、近年の子どもを取り巻く環境は、震災の影響で外遊びが減ったり、様々な危険や不安の要素が増えたために遊びの質が変わったりし、刺激を受けることが少なくなったため、本来生きていく上で必要な能力を身につけられない状況です。

《COTで体力・学力・精神力アップへ！》

COTは、どこでもできる運動（寝返りして立つ、身体を「くの字」や「Sの字」に曲げる基礎的な運動など）で、子どもたちの脳と身体に必要な刺激を与え、健やかな成長を促します。

また、指導者は子どもに運動を「させる」のではなく、子どもの意欲や運動欲求を「引き出す」工夫をして体力や学力、精神力を高めていきます。



▲COTの理論による障害物をくぐったり越えたりする運動

★次回「高齢者に対する効果」をご紹介します。

本庁舎学校教育課 内2365

シリーズで学ぶ

白河歴史人物伝

飢饉から民を救った代官

川崎 弥助 (1791~1863)



川崎弥助肖像 (佐久間律堂『救民代官 川崎弥助翁』より)

Vol.22

弥助は寛政3年(1791)に白河本町の近藤家の三男に生まれました。13歳のとき、同じ本町で穀物や油を商う川崎家の養子となりました。

《丹羽長重廟の再建》

弥助は、かつての白河藩主丹羽長重の廟所が荒廃していたことから、その再建を思い立ちました。白河の城下町を築き、水路を市中に整備した長重の恩に報いたいと考えたからです。弥助は工事の世話役となり、丹羽家(当時二本松藩主)や、白河の城下の人々と協力し、長重廟を再建しました。

《飢饉で救民に奔走》

同じ頃、天保の飢饉により、白河でも深刻な被害があり、藩主阿部正瞭は領内の富裕層に緊急の御用金を命じました。弥助はこのような時こそ蓄えた財産を使うべきであると

し、割り当て金の5倍以上になる600両を献上しました。これが評判となり、他の家々も相次いで米や資金を献上しました。

天保8年(1837)には、今の西郷村にあたる米村などの村々を治める代官に任じられ、同時に勘定奉行次席扱いとなります。町人でありながら藩の重職に取り立てられたことは、弥助の藩への貢献がいかに大きかったかを示しています。弥助はここでも私財を投じて飢えに苦しむ民に食料や医薬を世話しました。

弥助は常に質素儉約を旨とし、正直第一の商売を心掛けたため、晩年にはなお多くの財産を築き、子どもたちに分与したといえます。文久3年(1863)、弥助は73歳で亡くなりました。

なお、西郷の人々が弥助の功績をしので立てた「報徳碑」が、西郷村小田倉原中に現存しています。



弥助が再建に尽力した丹羽長重廟(尚明寺) 丹羽長重の200年忌となる天保7年(1836)に完成しました。弥助が奉納した石燈も残されています。

文化財課 ☎ 2310